

甲府城跡周辺確認調査報告書

県庁構内及び甲府城下町遺跡関係立会・発掘調査等報告

2006年3月
山梨県教育委員会

序

県都甲府市のはば中央に位置する県指定史跡甲府城跡は、戦国武将として名高い武田氏の滅亡後、戦国時代から近世への幕開けを象徴する城郭として造られました。

その役目は大きく、豊臣政権や徳川政権のもとでは、それぞれ東日本や西日本に対して政治的・軍事的中核として重要な役割を果したことでも知られていますが、文化的にも豊かな江戸文化が取り入れられ、甲斐国内だけでなく江戸文化の発信源ともなったことはよく知られています。

しかし、明治維新後に全国のはとんどの城郭が一齊に取り壊され、甲府城も同様の運命をたどりました。この時にかけがえのない多くの歴史的建造物や文化遺産が失われ、さらに近代化の波の中で、内城の西側半分は市街地化のため、北側は中央線建設のためその姿を失っていました。その一方で、甲府城の中核部は公園となり、現在に至るまで、長く県民の憩いの場となっていました。

このような歴史を辿るなか、江戸時代には能舞台や最大規模の御殿があった楽屋曲輪に、昭和初期に山梨県庁が建設されました。以来、様々な施設や道路が建設されてきましたが、ここ数年來は、甲府城公園整備に伴う学術的な発掘調査の成果により、県庁が旧楽屋曲輪に建てられたという認識も広まり、当センターでは県庁の耐震工事やケーブルの埋設など、県庁構内および周辺の県有地で工事がおこなわれる場合には、面積の大小に関わらず立会調査や発掘調査を数多く実施してきました。

なかでも、平成15年度に実施しました柳門跡の発掘調査では、石垣や石段など今まで明確に把握できなかった柳門に関連する調査成果をあげたことにより、県庁構内の多くの箇所には良好に遺構が残っていることが明らかになってきました。

さらに、甲府城下町遺跡としておよそ2,150km²が周知の埋蔵文化財包蔵地となっているなかで、近年JR甲府駅周辺の再開発が進み、あわせて武家屋敷の調査も実施され、地表下60cm内外で江戸時代の遺構が良好に残存している事例も相次いでおります。

本書では、このように旧甲府城内を中心に、甲府城下町にも視点を向けた発掘調査や立会調査の成果を記録に残すために作成したので、平成5年から平成17年の間に蓄積された調査成果を総合的に取り扱い報告するものです。

郷土の埋もれた歴史を掘りおこすことは、私たちの未来を学ぶことでもありますので、このようなかけがえのない文化財を、保存し活用していく必要があります。本書が郷土研究や文化財を学習するための資料や教材として、県民の皆様に大いに活用されることを願っております。

末筆ではありますが、本書の刊行にあたりまして、多大なご協力をいただきました関係者各位に心よりお礼申し上げます。

平成18年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 渡辺 誠

例　　言

1. この報告書は、山梨県甲府市丸の内・北口地内における旧甲府城内に関連する遺跡と、周知の埋蔵文化財包蔵地「甲府城下町遺跡」における調査成果をまとめたものである。
2. 「県指定史跡甲府城跡」は、山梨県文化財保護条例に基づき昭和43年12月に告示された史跡名称である。
3. 書籍名は「甲府城跡周辺確認調査報告書」（以下、「本書」という）である。
4. 本書掲載内容は、山梨県教育委員会（以下、「県教委」という）・山梨県埋蔵文化財センター（以下、「センター」という）が実施した旧甲府城内に造られた山梨県庁構内と周辺の県有地、ならびに「甲府城下町遺跡」を対象にした立会調査・確認調査・発掘調査成果を掲載した。
5. また甲府市教育委員会（以下、「市教委」という）が実施した調査成果を、甲府城跡ならびに甲府城下町遺跡の全体像をより正確に理解するため、公開されている範囲で掲載した。
6. 本書に掲載した調査成果は、近年に実施されたそれぞれの工事に起因するものであり、工事原因は個別に記載した（一部省略含む）。
7. 本書掲載の調査は、「文化財保護法」、「山梨県文化財保護条例」、「史跡整備事業及び埋蔵文化財発掘調査取り扱い方針」に基づき実施した。
8. 本書掲載の調査のうち、県有地内では山梨県教育委員会学術文化財課及びセンターが調査を実施し、センターが本書作成に必要な作業をおこなった。
9. 本書第Ⅱ章2～3節に報告している調査成果は、文化財保護法第57条の3（平成17年以降は第94条）に基づく通知のうえ実施した。また、出土遺物については同法ならびに遺失物法に基づき各管轄の警察署長へ通知した。
10. 本書第Ⅱ章2～3節に報告している事業で、立会調査などは文化庁補助金による県内分布調査で実施し、これ以外の発掘調査はそれぞれの事業者による負担で実施した。
11. 本書刊行までの整理作業期間は平成17年4月1日から平成18年3月31日まで、山梨県庁里吉別館内の整理室で実施した。
12. 本書の編集及び執筆は、センター主任文化財主事宮里学と非常勤嘱託職員上原健弥がおこなった。
13. 本書中の図版は、県教委及びセンターが刊行した年報・報告書等に掲載したものを一部変更し転載したほか、本報告のために調査時の記録から作成した。なお、転載した図版は、各図版中にその出典を示した。
14. 本書に掲載した調査写真は、県教委が撮影したものを使用している。
15. 絵図『樂只堂年録』第一七三巻は、財團法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会に掲載許可を得ている。
16. 写真・記録類はセンター、遺物は山梨県立考古博物館で保管・活用している。
17. 本報告書作成に際して、次の機関から協力をいただいた。

甲府市教育委員会文化スポーツ課、山梨県総務部管財課、同営繕課、帝京大学山梨文化財研究所
(順不同、敬称略)
18. 調査及び報告書作成に係わる整理報告従事者は以下のとおりである。

大塚敦子、山田静代、楠間美季江(順不同、敬称略)

凡　　例

1. 本書では、第Ⅰ章に甲府城跡及び甲府城下町遺跡の環境、第Ⅱ章に個別の調査成果、第Ⅲ章に全体の調査成果をまとめた。なお、第Ⅱ章では第1節は全体の概要を、第2節・第3節は県有地内で県教委が実施した調査を、第4節（表2）に市教委が実施した調査を掲載した。また、付編（巻末）には「山梨県文化財保護条例」、「史跡整備事業及び埋蔵文化財発掘調査取り扱い方針」に基づく埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについてまとめた。
2. 本書中の「甲府城跡」は、内堀の内側部分を指す。また、「甲府城下町遺跡」は近世の城下町部分で周知の埋蔵文化財包蔵地として指定されている範囲を意味する。また、報告書名に「日向町遺跡」とある遺跡も「甲府城下町遺跡」の指定範囲内に所在する近世の遺跡であることから、甲府城下町遺跡としてまとめた。
3. 市教委が実施した甲府城下町遺跡内の調査については、市教委が付けた呼称をそのまま掲載した。
4. 本書掲載の調査は、甲府城跡関連遺跡と「甲府城下町遺跡」（図II-1に範囲を図示）の指定範囲内で実施された調査の内、近世の遺構や遺物が検出された事例に限定した。
5. 各調査地点については、図II-1・図II-3に示し、表1に本書掲載の調査一覧をまとめた。
6. 本書の報告にあたり、報告対象範囲を任意で5つの地区に区切り、区域ごとに掲載した。また各調査に報告番号を付し、整理した。区域や報告番号については、図II-1及び表1に示した。
7. 第Ⅱ章では各調査の概要をまとめたが、詳細については各参考文献を参照していただきたい。
8. 第Ⅱ章では、概要のほかに調査の詳細を項目ごとにまとめた。なお、トーン部分は特に重要と考えられる項目である。以下に、各項目のうち説明が必要だと思われるものについて記載する。

調査名 報告番号の右に記載。調査理由にあたる。

調査地点 所在地のほかに、より具体的な位置がわかるよう記載した。

歴史的位置 絵図と調査成果の検討から判断した。甲府城跡の調査は曲輪名を記し、甲府城下町遺跡の調査では図I-2に示した土地割りに基づき、内堀内は甲府城内・二の堀内は武家地・三の堀内は町人地とした。また、調査成果や絵図資料から特に詳細が判断できる場合に限りより具体的に記載した。

調査面積・参考文献など、項目に「-」は該当なし、あるいは不明であることを意味する。

検出深度 遺構や包含層を検出した調査時の現況GLをもとに表記した。

9. 図版について

縮尺・凡例 各図版中に記載した。

方位 位 図版類は北が上になるよう心掛けたが、例外もあるため各図版中に示した。

土層 各報告によってI（ローマ数字）や1（アラビア数字）が用いられていたが、本書ではアラビア数字に統一した。

図版番号 同一ページ内に遺構図や土層図など複数の図を掲載しているが、図版番号は1ページに対して一つとし、個別に名称を付した。

10. 本書中の図版に使用した地図は、平成3年に作成された「甲府市都市計画図1/10000」「同1/25000」である。また県庁構内の建物配置図は、山梨県総務部営繕課が所有するものを使用した。
11. 図I-2は、山梨県の遺跡検索システム（GIS）から作成した。
12. 図版に使用した絵図は、「楽只堂年録」第一七三巻のうち、調査に係わる部分を拡大したものである。なお、調査地点を絵図中に示しているが、入隅部などを除くと若干の誤差が生じている可能性がある。

目 次

序言

例言

凡例

目次

第Ⅰ章 甲府城跡周辺の環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第1項 原始～近世	1
第2項 明治以降	5
第3項 甲府城跡周辺における埋蔵文化財調査のはじまり	7

第Ⅱ章 調査成果

第1節 調査の概要	8
第2節 県庁構内の調査	11
第3節 県庁周辺の調査	25
第4節 県庁周辺におけるその他の調査	37
第Ⅲ章 まとめ	38

付編 文化財保護の基本的な考え方	39
------------------------	----



本書作成における作業状況

第Ⅰ章 甲府城周辺の環境

第1節 地理的環境

甲府盆地は、北を奥秩父山地、西を南アルプス、南を御坂山塊にそれぞれ区切られ、一辺が約20km程度の逆三角形を呈している。面積は約190km²で、標高は概ね250mとなっている。

甲府城が築城された一条小山は、現在の甲府駅周辺に広がる扇状地の中では丘陵状に孤立している。元々甲府城北東に位置する愛宕山の一連の尾根であったものが、扇状地化が進むなかでその周囲が埋没し、現在のような地形が形成されたためである。

地形図（図I-1）をみると、甲府城下町が位置する「扇状地Ⅰ」は、甲府市街地の西方を南北に流れる相川の西側に広がる「扇状地Ⅱ」に比べ標高がやや高くなっていることが指摘されている。また相川と荒川間に形成された扇状地は、荒川に沿って高台が部分的にみられる。しかしその一方で、後背湿地や旧河道の存在から川の洪水等の影響を受けていることがわかる。こうしたことから、甲府城下町周辺は扇状地の中でも比較的水害の少ない安定した土地であったことがうかがえる。

第2節 歴史的環境

第1項 原始～近世

原始・古代（旧石器～平安時代）

甲府城周辺を中心とした盆地部では、この期間に該当する遺跡分布はみられるものの、遺物の散布地と位置付けられている遺跡が多く、不明な点が多い。明晰な集落跡などの生活の痕跡を残す遺跡があり確認されていない背景には、中近世における土地の改変を受けた影響から消失してしまった可能性のほか、図I-1で示したように、この一帯が扇状地という自然環境から集落遺跡が形成されにくかったことや流路のため消失してしまっていることも考えられる。ただし、縄文時代から平安時代までに属する遺物は少なからず出土しているため、未発見の集落跡が存在する可能性がある。

周辺で現在知られている一番古い集落遺跡では、甲府城下町から荒川を南側に超えた地点に所在する上石田遺跡がある。荒川の南側であるこの一帯は、微高地であったことから集落を築くのに適していたためだと考えられる。荒川の北側に広がる扇状地帯（図I-1の扇状地Ⅰ）では、縄文時代の集落は確認されていないものの、甲府城内の発掘調査では縄文土器や石器が出土している。また古墳時代以降の集落が発見されている塩部遺跡や朝氣遺跡のほか、甲府城下町遺跡の南西側に位置する宝町遺跡と寿町遺跡、南側の食料工場遺跡と甲府城下町周辺の散布地からも縄文時代の遺物の出土が確認されていることから、この一帯は当時の生活圏であったといえる。これまで弥生時代の集落跡は確認されていないが、塩部遺跡や朝氣遺跡では住居跡が検出されており、居住域であった可能性が考えられる。また甲府城下町南側の幸町A遺跡は、弥生時代の遺跡が包蔵地として知られているほか、縄文時代と同様に周辺の散布地からも遺物が見つかっている。

古墳時代の集落として、塩部遺跡や朝氣遺跡がある。塩部遺跡は古墳時代前期の集落として、甲府盆地北部における一勢力圏と考えられ、住居跡のほかに方形周溝墓群が確認されている。また平安時代の集落跡も見つかっており、古墳時代から平安時代に至る重層遺跡として知られている。朝氣遺跡は、古墳時代後期の集落跡で、遺構や遺物の集中が確認されている。また平安時代の集落としても知られ、住居跡や遺物の集中がみられるほか、奈良時代の住居跡もみつかっている。

中世（平安末～戦国時代末）

愛宕山に連なるが独立した小山（現在の甲府城跡）の付近には、平安時代後期に存在を確認できる一条郷と、その領主で鎌倉幕府成立に関わる途中で謀殺されたといわれる一条忠頼の居館があった。甲府城の別称である一

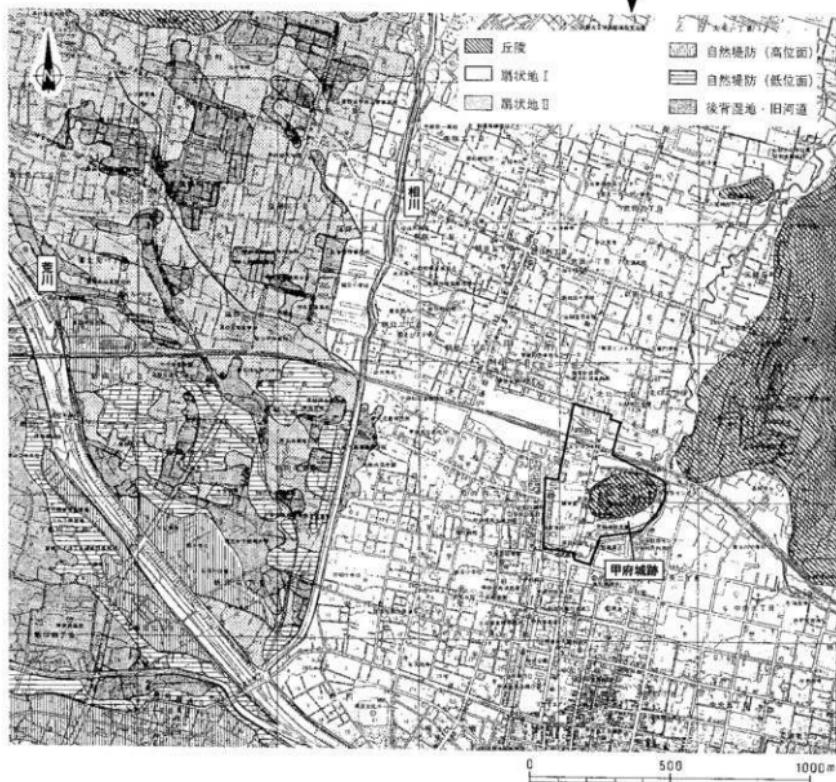
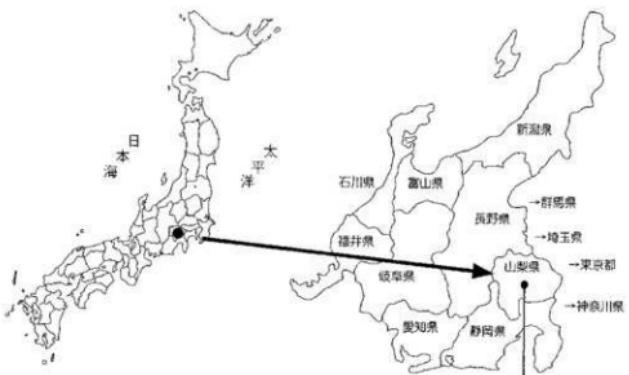


図 I-1 甲府城跡の位置と地理的環境「塩部遺跡」1996より転載（一部改）

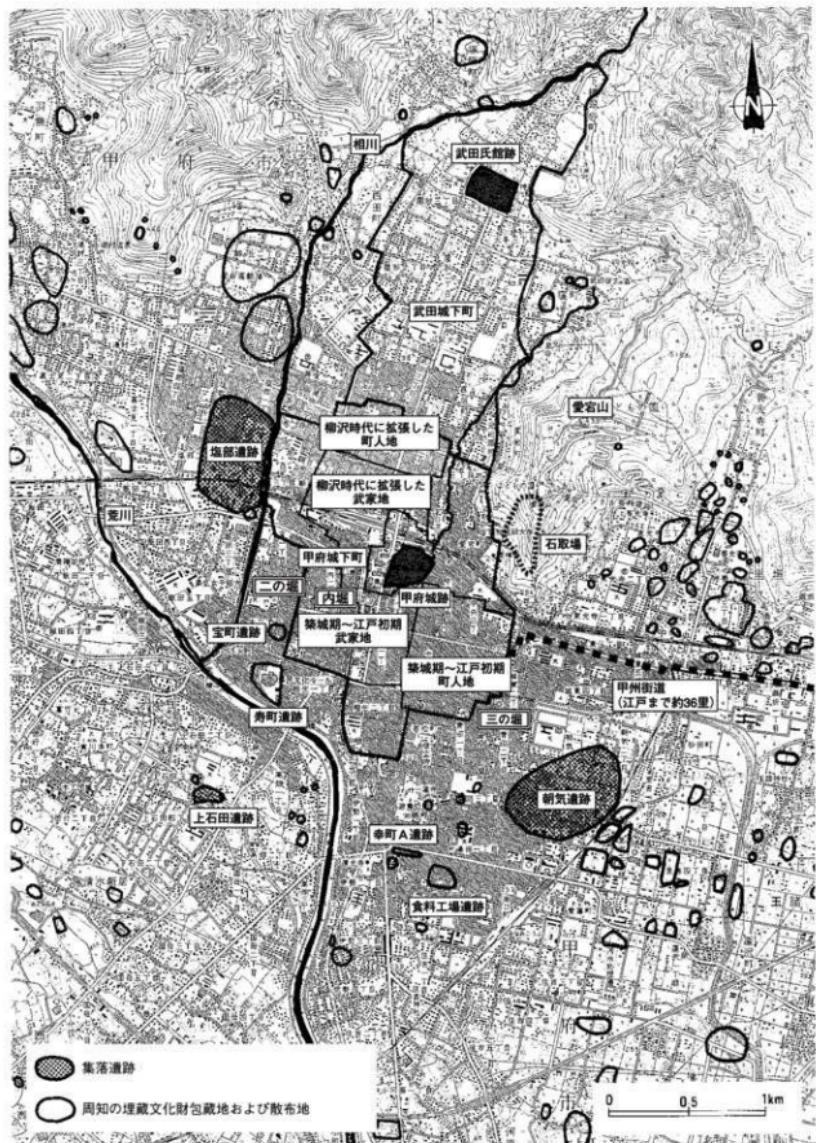


図 I-2 甲府城跡と周辺遺跡の位置

条小山城はこの歴史に起因したものである。なお、居館の所在地などは不明である。忠頼謀殺後、その夫人が小山に菩提の尼寺を建立し、14世紀後半に一条時信が一蓮寺（時宗・福久山福應院・一条道場）に改めたとされるが、所在地は現在も確定できていない。

戦国時代に入ると、武田氏の居館である躑躅ヶ崎館を中心に、その南方には武田城下町が形成された。その南端が現在のJR中央線甲府駅南口周辺で、一条小山には武田氏居館を基点に展開される城下町の前衛防備のため、大永4年（1524）に砦が建設されたと「高白齋記」にはある。武田城下町の南端部は、寺院やその門前町であった可能性が指摘されているが、武田城下町形成当時を示す十分な絵図資料がないほか、甲府城築城に伴って新たに形成された甲府城下町によって、解体・移築などがおこなわれているため、不明な点が多い。

近世（甲府城築城～甲府勤番）

武田氏は、天正10年（1582）年3月の織田信長・徳川家康の侵攻をうけ、天目山（現甲州市大和町田野付近）での武田勝頼の自刃によって、終焉を迎えた。その後、甲斐を支配したのは織田信長で、城代河尻肥前守秀隆を配し、武田氏旧臣の穴山信君が河内領（現南巨摩付近）を小山田信茂は郡内地を与えられ、これ以外の甲斐国内と信州の一部で合計20万石余を秀隆が支配したとされる。

天正10年（1582）に本能寺の変で信長が謀殺された後、天正18年（1590）までの8年間甲斐を支配したのは徳川家康で、平岩七之助親吉を城代として配した。この時期に該当する発掘調査成果は確認されていないが、いくつかの史料が存在し、このあたりが甲府城築城天正年間説の一因といえる。

天正18年の小田原の役を境に、家康はその領地を関東に移され、甲斐は初めて豊臣領となり、秀吉の姉の子で、秀吉の甥にあたる羽柴少将秀勝が支配を開始した。この時期の史料は極めて少なく、また発掘調査による成果も確認できない。また、在任期間半年で岐阜城へ移っていることからも、具体的な築城作業を確認することは困難といえる。秀勝移封後は、加藤遠江守光泰が天正19年（1591）から文禄2年（1593）まで支配した。

文禄の役の最中に光泰が没すると、甲斐の支配は浅野弾正少弼長政とその嫡男浅野左京幸長に代わった。甲府城築城と長政・幸長との関わりは、発掘調査により甲府城跡の各曲輪より浅野家紋瓦が大量に出土したこと、建物に瓦を葺くまで実施したことは確実である。同時に、朱や金箔を施された豊臣家の家紋瓦が出土していることや、豊臣系城郭の特徴である野面積み石垣の技術導入からも、秀吉の命令のもとで、浅野が築城したと判断でき、築城目的は関東の徳川牽制といえる。

甲府城築城に伴い、武田城下町に代わる新たな城下町づくりも浅野によって進められる。浅野は武田城下町を城郭の南東側にあった青沼郷を中心とした地区に移す。大手門の南側部分は、武家地として二の堀で囲われ、町人地と定められた城の南東部分は、三の堀で囲われた。東西に甲州街道が抜ける町人地は、南北四条、東西六条に町割がされ、二十三町から成る。また城郭北側に当たる山手門北西部分にも、武田時代の城下町を継承した二十六町の町人地が区画されていた。築城期の武家地が、大手門正面に広がる比較的狭い範囲であったのは、江戸初期は城代・城番制が敷かれて、支配者が在勤していなかったために甲府城在勤の家臣が少なかったためであろう。

甲府城の発掘調査では、城内全域より五輪塔・石造物・石臼が石垣の裏栗石より多量に出土している。その形態や銘から16世紀代所産で、一蓮寺などの寺院に関連する遺物と判断できる。一条小山（甲府城跡）に立地していた一蓮寺は、甲府城築城に伴い現在の甲府市太田町に移転したことが知られている。

関ヶ原の戦後、徳川が甲斐を再領し、その一門が甲斐国を支配する。慶長5年に幸長は紀州和歌山へ移封となり、慶長6年（1601）城代として再度平岩親吉が配された。慶長8年（1603）には家康の九男徳川義直（幼名は五郎太）が配され、城代として親吉がそのまま在国した。慶長12年（1607）以後は、幕府直轄となり武川十二騎が城番を勤めた。元和4年（1616・一説には元和2年）から寛永9年までは、2代將軍徳川秀忠の次男の徳川忠長が支配したが、引き続き武川十二騎が城番としておされた。その後、寛永10年（1633）からは武田氏遺臣で徳美藩（山梨県塩山市）藩主の伊丹康勝が城番となり、寛永13年（1636）以降は寛文元年（1661）まで1年交代の旗本による城番制となった。

寛文元年（1661）～宝永元年（1704）の間、3代將軍徳川家光四男の徳川綱重とその子徳川綱豊（後の6代

將軍家宣)が甲府藩・甲府家をたてた。文献史料により寛文4年(1664)に幕府から2万両を得て、約2年間の大規模な修復がおこなわれたことが知られている。

宝永元年(1704)からの約20年間、第5代將軍徳川綱吉の側用人柳沢吉保、その子柳沢吉里が、大和郡山に転封されるまで甲府藩主となる。吉保は江戸にいたが、吉里が甲府城に入城した時、柳沢家15万石が入国し、家臣団とその家族など推定で2万人の移民があったと想定でき、手狭になった築城期の武家地拡張のため、城内はもとより城下は武家地を中心に都市再整備がおこなわれる。

新たに定められた武家地は、城郭の北及び西側に広がる二の堀内側部分にあたるが、絵図にはこの拡張地区に筆頭家老だった柳沢権太夫などの名前があることから、武家地の中心が大手門正面から山手門北西部に移ったことがわかる。また武家地の拡張に伴い、三の堀の内側部分が町人地となるが、移動した町名を表すために、新しい町には町名に「新」を付したのに対して、移動前の町には「元」を付した。このように、柳沢家による城下町の整備は、新たな町割りを進めていくという大がかりなものであったことがわかる。

こうした整備のほかに、宝永3年(1707)の城内外の大改修や、正徳3年(1713)の洪水により被害を受けた堀・石垣の大改修などが、絵図などから把握することができる。この時期の遺物として柳沢家の家紋入りの瓦が数点出土しているほか、門・番所・石段・土蔵など施設の構造が当該期の絵図と一致することが確認できる。

享保9年(1724)以後、幕府の直轄領となり、甲府勤番支配のもとに甲府城が警護される。この時期の史料は非常に多く、勤番士の記録や町方の御用留などに、甲府城閑連の記録が見られる。享保12年(1727)には大火により城内の建物が罹災し、その後の約140年の間にたびたび修復計画がおこったが、大規模修復は実施されず、必要最低限のみがおこなわれる。

第2項 明治以降

城域の縮小と廃城

慶応3年(1867)の大政奉還後、翌年の明治元年2月に官軍鎮撫隊が入申し、3月5日には甲府城が開城となり、東海道總督參謀板垣退助ら官軍による入城をむかえる。同年6月には城代が廃止され「甲斐鎮撫府」が置かれることとなり、その後「甲斐府」「甲府県」と名称を変え、明治4年の廢藩置県により「山梨県」に改められる。

甲府城は、明治4年(1871)に兵部省(後の陸軍省)の管轄下に置かれる。明治6年(1873)、太政官が全国の城郭の存廃を決定することになると、甲府城は内城だけが保存され、残りは市街地化されることが決まる。翌年、明治7年(1874)には太政官布告により、内城以外の取り壊しがはじまり、二の堀・三の堀が埋め立てられる。こうして城域の縮小が進み、内城のみが残される状態になる。

内城の利用と進む城域の縮小

明治7年(1874)に甲府城を廃城とすることが決まり、当時の甲府城の管轄をしていた陸軍の施設として不向きであるとの判断が下ると、殖産興業という国の施策を反映して勧業試験場の建設や博覧会の開催など残された内城部分の活用がはじめられる。山梨県では、製糸と葡萄が殖産興業の柱とされ、明治7年に城内の空き地に炉を作り、製糸場建設のための煉瓦石製造がおこなわれる。その同時期には、楽屋曲輪内の御殿で養蚕が実施されていた。また、明治9年(1876)には外国の有益植物の試験栽培と頒布を目的として勧業試験場が設置され、明治6年(1873)におこなわれた桑・桐の植樹に加え、内城全域で植樹がはじまる。山梨県は、古くから葡萄の産地として知られており、甲府城内では江戸時代から葡萄の栽培がおこなわれていた。その後、明治10年(1877)に勧業試験場の付属施設として葡萄酒醸造所が鍛冶曲輪に建設される。葡萄酒醸造所は、勧業試験場の停止に伴い、明治17年(1884)に閉鎖され民間に払い下げられるが、明治23~24年(1890~91)にかけては外堀を貸し付けて蓮根が栽培されるなど、明治期の前半において甲府城跡では栽培が盛んにおこなわれていた。

勧業試験場の停止以後、城内には試験場に代わって他の施設が建設されはじめると、城域縮小の第二段階を迎える。明治33年(1900)には、屋形曲輪から楽屋曲輪におよぶ広い範囲に甲府中学校(現在の甲府第一高校)が建設される。また、明治29年(1896)に清水曲輪が鉄道院に割譲されると、甲府城北側部分を東西に横断する中央線の開通により、明治36年(1903)には清水曲輪・花畠が消失する。さらに明治39年(1906)に入ると、

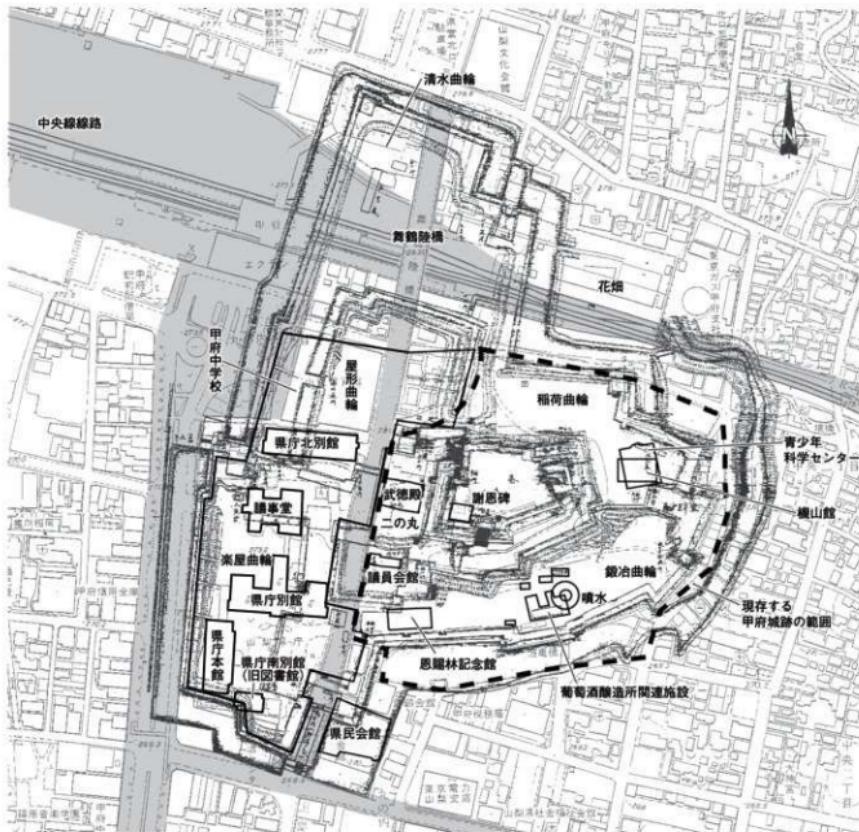


図 I-3 甲府城跡周辺の主要な近代構造物

機山館が稲荷曲輪に建設される。甲府城跡は、明治37年(1904)に舞鶴城公園として開放されるが、明治44年(1911)に教育会付属図書館が二の丸に設置されるなど、その後も施設の建設がつづく。

大正6年(1917)は、甲府城跡の敷地利用という観点から一つの転機といえる。この年、甲府城は村松甚蔵氏の寄付を受けて県有財産となり、屋形曲輪・樂屋曲輪を中心とし、現在も残る県の施設が建ち並ぶようになる。昭和2年(1927)に内堀が埋め立てられると、樂屋曲輪などで官公庁関連施設の建設が進む。昭和3年(1928)には二の丸に武徳殿が建てられ、昭和6年(1931)には、甲府中学校跡地に県庁・議事堂の移転が決まる。時期は遡るが、大正11年(1922)に山梨県に恩賜林が譲渡されたことを記念して謝恩碑が本丸に建てられ、昭和28年(1953)に恩賜林記念館が鍛冶曲輪に建設されている。その他、昭和30年(1955)に内堀を埋め立てて県民会館が、昭和41年(1966)には二の丸に県議会議員会館の建設が進む。

官公庁関連施設の建設が甲府城の西側部分を中心に進む一方で、現在舞鶴城公園として残る東側では、戦後になると憩いの場としての施設が建設されるようになる。堀にはボート停留所ができ、鍛冶曲輪や本丸内に噴水が建設されたほか、稲荷曲輪に青少年科学センター、鍛冶曲輪に憩いの施設が相次いで建てられた結果、近世城郭としての甲府城本来の景観からは異なっていった。また天守台の気象鉄塔が取り壊しとなる一方で、昭和35年(1960)に桜が57本植栽され、昭和39年(1964)には本丸付近に東京オリンピック記念で苗100本の植樹がおこなわれるなど、公園としての様相を強めていった。

清水曲輪や屋形曲輪を中心とした内城の北西部は、樂屋曲輪の堀を埋め立てて二の丸・屋形・樂屋曲輪へと駅舎の敷地が広げられるなど、甲府駅を中心とした開発が一層進み、昭和30年代頃までは、内堀の大部分も埋め立てられる。また、昭和42年(1967)には甲府城を南北に抜ける舞鶴陸橋が開通し、ほぼ現在の甲府城跡周辺の景観が出来上がる。こうして、明治7年(1874)に廃城となり残存していた内城は、東を公園、西を県庁等の施設、北側を中心とした範囲は鉄道や市街地化によって失われてきた。平成17年度現在で残る城域はおよそ6ヘクタールと、内城全体で約19ヘクタールだった当時に比べて三分の一程度にまで縮小されている。

第3項 甲府城跡周辺における埋蔵文化財調査のはじまり

甲府城は国からの払い下げにより県有財産となるが、甲府城を中心とする都市開発は進み、内城の東半分が公園として残っていた。こうした状況のなか、県教育委員会は甲府城跡総合調査團を組織し、昭和43年(1968)に舞鶴城公園として残存している範囲を県指定史跡に告示した。それまでは、城内には歴史的に関わりのない施設や記念碑などが多く建てられ、現存する石垣についても十分な管理がおこなわれていなかった。

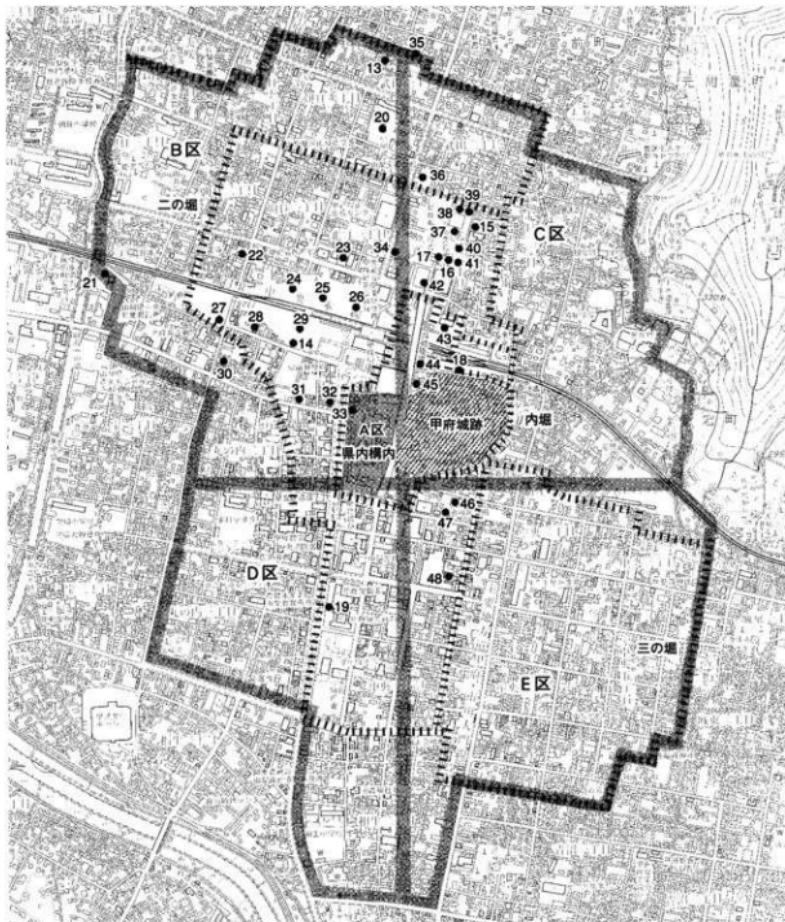
しかし、平成2年(1990)に公園整備事業が県土木部によって着手され、城内の発掘調査や石垣改修工事などの史跡整備と園路や広場といった公園整備が同時に進められてきた。

甲府城跡が県指定史跡となるなかで、近世の甲府城下町は、堀の埋め立てや都市開発によって景観が大きく変わっていくが、城下町部分に対する文化財としての評価から、周知の埋蔵文化財包蔵地「甲府城下町遺跡」として指定される。その指定は、三の堀の内側までを含む区域と、三の堀の外側ではあるものの絵図に記された南側の町屋、西南の武家屋敷部分を加えた範囲になっている。この指定は、開発自体を禁止あるいは制限するものではないが、指定範囲内における開発の際には、甲府市や県教育委員会と開発事業者間による協議がおこなわれ、必要に応じて開発前の調査記録がなされるようになっただけではなく、場合によっては工事内容の一部変更等によって遺跡の保存がおこなわれている。

第Ⅱ章 調査成果

第1節 調査の概要

本章では、県庁構内と周知の埋蔵文化財包蔵地「甲府城下町遺跡」として指定されている範囲内の調査についてまとめる。本報告で扱う範囲が広いため、対象範囲を便宜的にA～Eに区切り、第2節は県庁構内、第3節はその他県有地とし、第4節にはその他機関による調査をまとめる。なお、各調査地点に番号を付して整理する。各調査の掲載ページ等は、次頁の表1を参照していただきたい。



図II-1 甲府城下町遺跡の範囲と調査地点

報告番号	区城	掲載場所 (章一節)	掲載 場所 (頁)	道 路 名	所 在 地 (甲府市)	道 構	遺 物	検出深度 (m)
1	A	II-2	12	甲府城跡(楽屋曲輪)	丸の内1-6-1	石垣	—	GL-1
2	A	II-2	13	甲府城跡(楽屋曲輪)	丸の内1-6-1	石垣・石組溝	—	GL-0.85
3	A	II-2	14	甲府城跡(柳門)	丸の内1-6-1	石垣・石段	瓦	GL-0.6
4	A	II-2	16	甲府城跡(内堀)	丸の内1-6-1	石垣	瓦	GL-0.6
5	A	II-2	17	甲府城跡(楽屋曲輪)	丸の内1-6-1	石垣・溝・土塁	瓦	GL-0.3
6	A	II-2	18	甲府城跡(楽屋曲輪)	丸の内1-6-1	石垣・溝	陶磁器・瓦	GL-1.2
7	A	II-2	19	甲府城跡(楽屋御殿)	丸の内1-6-1	石列	瓦	GL-0.5
8	A	II-2	20	甲府城跡	丸の内1-8-5	なし(岩盤)	—	GL-0.05
9	A	II-2	21	甲府城跡(楽屋御殿)	丸の内1-6-1	なし(岩盤)	瓦	GL-1
10	A	II-2	22	甲府城跡(二の丸付近)	丸の内1-6-1	なし(岩盤)	—	GL-0.3
11	A	II-2	23	甲府城跡(二の丸付近)	丸の内1-6-1	なし(岩盤)	瓦	GL-0.3
12	A	II-2	24	甲府城跡(楽屋曲輪)	丸の内1-6-1	石垣	瓦	GL-0.6
13	B	II-3	26	甲府城下町遺跡	武田1-88-1	—	陶磁器・瓦	GL-0.15~0.3
14	B	II-3	27	甲府城下町道路(43街区)	丸の内1-1	井戸・溝・土塁	陶磁器・瓦	GL-0.1~0.7
15	C	II-3	29	甲府城下町(日向町遺跡第1地点)	北口2-14	墓・溝	古銭・両面鏡	GL-0.4
16	C	II-3	30	甲府城下町(日向町遺跡第2地点)	北口2-11	井戸・溝状遺構	陶磁器	GL-0.4
17	C	II-3	31	甲府城下町道路	北口2-8-10	土坑	土師質土器	GL-0.3~0.4
18	C	II-3	32	甲府城跡(内堀)	丸の内1-1	廐底・(岩盤)	瓦	GL-1.6
19	D	II-3	35	甲府城下町道路	中央1-10-7	石列・配石状遺構	陶磁器	GL-0.4(0.7)
20	B	II-4	37	甲府城下町道路	武田1-3	石組溝	陶磁器	—
21	B	II-4	37	甲府上水道跡	宝1-4	上水跡(水路・杭)	—	—
22	B	II-4	37	甲府城下町道路	朝日2-5	溝	陶磁器	—
23	B	II-4	37	甲府城下町道路	北口1-2	溝・井戸	陶磁器	—
24	B	II-4	37	甲府城関係道路B西区	丸の内1-1	溝・井戸	陶磁器	—
25	B	II-4	37	甲府城関係道路B区	丸の内1-1	井戸・水溜	陶磁器・瓦	—
26	B	II-4	37	甲府城関係道路A区	丸の内1-1	井戸・溝	陶磁器	—
27	B	II-4	37	甲府城下町遺跡	宝1-1	二の堀跡	陶器	—
28	B	II-4	37	甲府城下町道路(裏先手小路)	丸の内1-8	裏先手小路道路面	陶磁器	—
29	B	II-4	37	甲府城関係道路42-43街区	丸の内1-1	溝	陶磁器	—
30	B	II-4	37	甲府城下町道路	丸の内2-9	井戸・溝	—	—
31	B	II-4	37	甲府城下町道路	丸の内2-4	溝・ビット	陶磁器	—
32	B	II-4	37	甲府城下町道路	丸の内2-3	馬場跡	瓦・陶磁器	—
33	B	II-4	37	甲府城内堀	丸の内1-7	内堀跡・石垣	—	—
34	B	II-4	37	甲府城下町道路	北口2-10	溝・井戸・埋桶	瓦・陶磁器	GL-0.3
35	C	II-4	37	武田城下町道路	武田1-6	三の堀跡	土製品・古銭	—
36	C	II-4	37	甲府城下町道路Ⅲ	武田2-1	溝・土坑	陶磁器	GL-0.2~0.4
37	C	II-4	37	甲府城下町道路Ⅰ(桜シルク跡) A区	北口2-15	井戸・溝・土塁	古銭・陶磁器	GL-0.4
38	C	II-4	37	甲府城下町道路Ⅰ(桜シルク跡) B区	北口2-15	二の堀跡	陶磁器	GL-0.1
39	C	II-4	37	甲府城下町道路	北口2-15	二の堀跡・土塁	—	—
40	C	II-4	37	甲府城下町道路	北口2-50	井戸・溝・土塁	—	—
41	C	II-4	37	甲府城下町道路	北口2-50	溝・井戸	瓦・陶磁器	—
42	C	II-4	37	甲府城下町道路	北口2-8	溝・土塁	—	—
43	C	II-4	37	甲府城(30街区)清水曲輪	丸の内1-1	石垣	瓦・陶磁器	—
44	C	II-4	37	甲府城屋形曲輪	丸の内1-4	—	瓦	—
45	C	II-4	37	甲府城屋形曲輪	丸の内1-4	瓦溜	家紋瓦	—
46	E	II-4	37	甲府城下町道路	中央2-13	溝・土坑	陶磁器	—
47	E	II-4	37	甲府城下町道路	中央2-13	溝・井戸	—	—
48	E	II-4	37	甲府城下町道路	中央2-2-1	溝・土坑	陶磁器・木構	—

表1 甲府城跡・甲府城下町遺跡の調査一覧

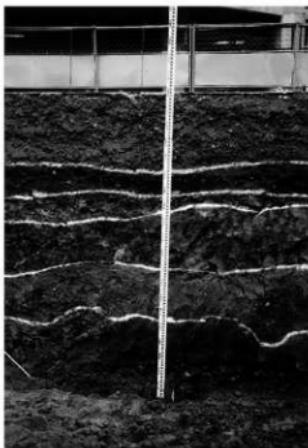
県庁構内（甲府城跡）・甲府城下町遺跡の土層について

県庁構内の土層

平成4年（1992）、県庁北別館南側に鉄塔が建設され、建設地点では良好な土層が確認されている。県庁内では傾斜が認められるため、構内全体に同様の堆積が存在するのか不明であり、当該地点を基本土層とすることはできないものの、構内における今後の調査に役立つと考え、ここに掲載する。

土層（検出レベル）

- 1 (GL-00cm) 砕石など、戦後の埋め立て
- 2 (GL-40cm) 明治以降の埋め立て
- 3 (GL-50cm) 江戸期の包含層
- 4 (GL-60cm) 自然堆積土（粘質土層）
- 5 (GL-70cm) 自然堆積土（粘質土層）
- 6 (GL-100cm) 自然堆積土（粘質土層）



北別館南側

甲府城下町遺跡の土層

周知の埋蔵文化財包蔵地「甲府城下町遺跡」内では、山梨県教育委員会によって日向町第1地点（報告番号15）・日向町第2地点（報告番号16）・甲府城下町遺跡（報告番号14）で発掘調査がおこなわれている。各調査地点の土層については第II章第2節以降で詳しくふれるが、ここでは日向町第1地点及び第2地点の土層断面の写真を掲載する。



日向町遺跡第1地点

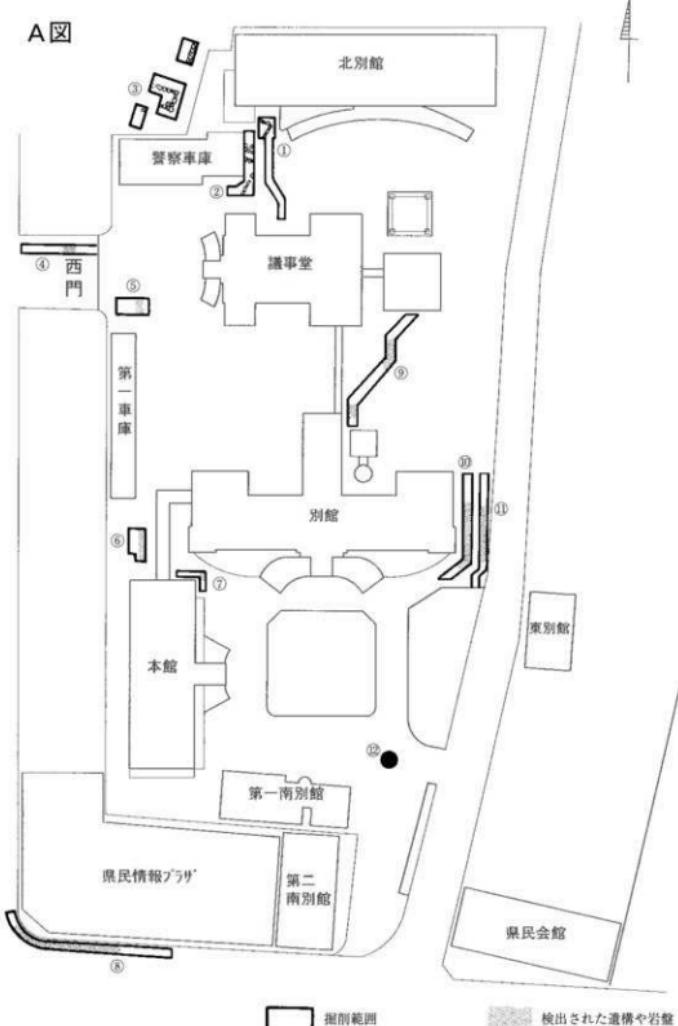


日向町遺跡第2地点（第2号井戸）

図II-2 県庁構内と甲府城下町遺跡の土層

第2節 県庁構内の調査

A図（1～12）：県庁敷地内では、施設の建設工事のほか、免震工事や高度情報化にともなう埋設管工事がおこなわれている。本節では、こうした工事に伴う調査成果についてまとめる。



図II-3 県庁構内の建物配置図と調査地点

1 情報管理設に伴う調査

所 在 地 甲府市丸の内 1-6-1
事 業 名 県庁舎集中化改修電気設備工事
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
調査期間 2005年10月29日、31日～11月1日、11月8日
参考文献 一

調査地點	警察車庫と議事堂の間
歴史的位置	楽屋曲輪内の柳門東側にあった番所北東部の石垣
調査面積	—
検出深度	GL-1 m
検出遺構	石垣の入隅部
検出遺物	—
備考	埋設保存

概要 当該地点では攪乱が激しく遺物も検出されなかったが、部分的に地山が確認された。また、調査地区北側の舗装面から深さ 1 m で石垣の入隅部が確認された。石垣は、東西方向に 3 石（野面石）・南北方向に 3 石（加工石材）あり、粘土質の地山に据えられた根石と判断できる。2001年度調査で確認された南北に延びる石垣は、今回検出された南北の石垣に統く可能性が極めて高い。検出された石垣は埋設保存とし、議事堂脇に置かれていた石垣の加工石材と一緒に埋設保存した。



掘削状況（南西から）



調査状況（南から）



石垣検出状況（西から）



石材埋設状況

図 II-4 調査状況

2 通信線埋設に伴う調査

所在地 甲府市丸の内 1-6-1

事業名 岐阜金免露工事

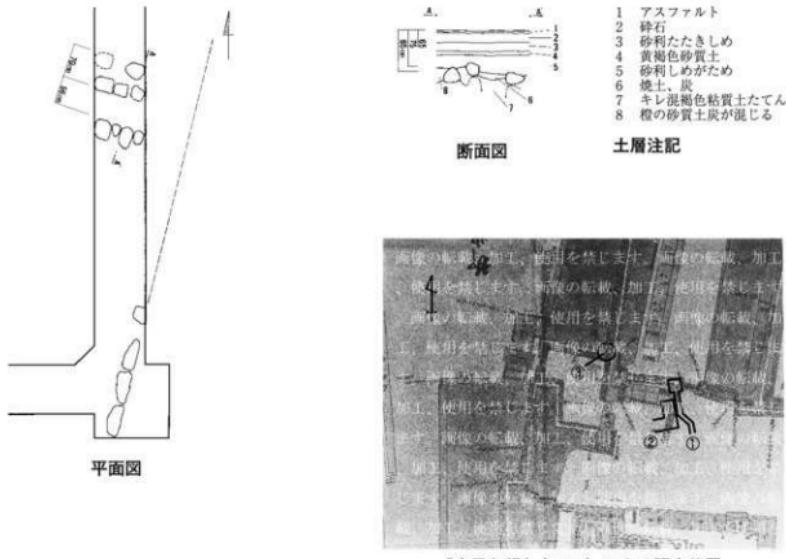
調査機関 山梨県教育委員会

調查期間 2001年9月7日

参考文献

調査地點	警察車庫南東の角
歴史的位置	楽屋曲輪内の柳門東側にあった番所付近
調査面積	—
検出深度	GL-0.85m
検出遺構	石組の溝（水路もしくは雨受け）・石垣
検出遺物	—
備考	遺構は埋設保存

概要 アスファルト舗装面から深さ85cmで、二つの石列を検出した。東西に延びる石列は、石の間がおよそ56cmであった。絵図『楽只堂年録』から、石列は番所跡の南側にあたり、石列の出土状況から建物に沿ってつくられた水路か雨受けとしての機能が考えられる。北東方向に並ぶ石列は、楽只堂年録から番所の西側にあり柳門のほぼ対面に築かれた石垣である可能性がある。この石列は、2005年度の調査1で検出された石垣入隅部の延長線上にあたる石垣である可能性が極めて高い。



図II-5 遺構の概略図と絵図上の調査位置

3 公用車駐車場建設に伴う調査

所在地 甲府市丸の内 1-6-1
事業名 公用車駐車場建設
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
調査期間 2003年8月11日～12日
参考文献 山梨県埋蔵文化財センター『年報』20 2004.8

調査地點	北別館西側
歴史的位置	柳門周辺
調査面積	437.7m ²
検出深度	GL-0.6m
検出構造	石垣・石段
検出遺物	奈良・平安時代の土器、近世の瓦
備考	遺構は盛土をして埋設保存

概要 設定したトレンチから、東西方向へ延びる石垣（以下「東西石垣」）、南北方向へ延びる石垣（以下「南北石垣」）、石段を確認した。東西石垣は、柳門エリアと堀を区画する江戸期に改修された石垣で、南北石垣は柳門の北側袖から北方向へ延びる築城期の石垣である。これらの石垣は入隅で連結している。確認された石垣の上部は消失しているが、埋設部分は良好に残っていることが判明した。



調査区全景（東から）



東西石垣（北から）



南北石垣（西から）

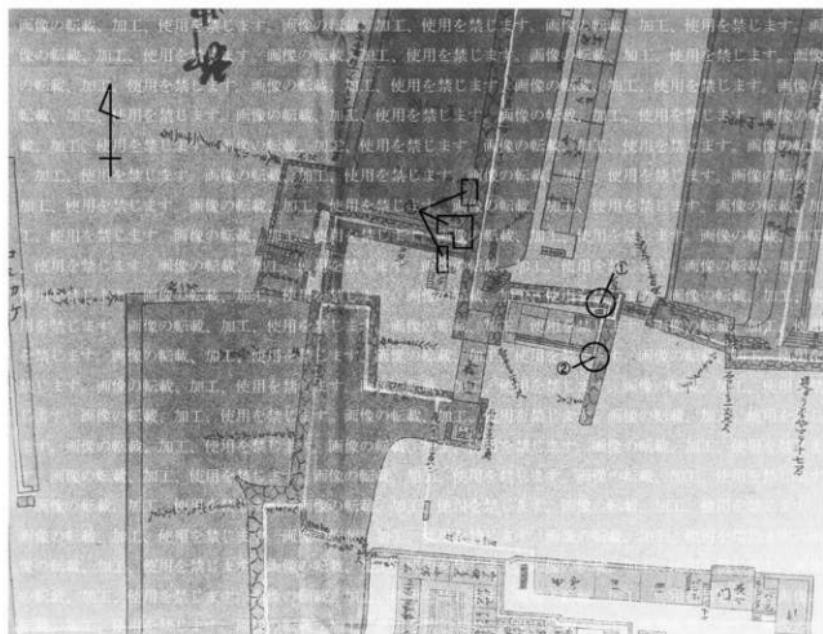


石段（南から）

図II-6 石垣の検出状況



遺構図（平面図・東西石垣の立面図）



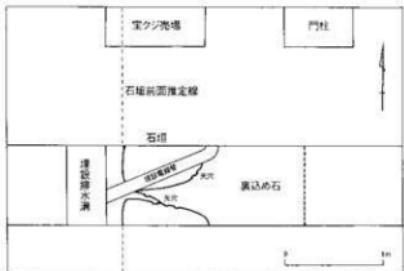
図II-7 遺構図と『楽只堂年録』(1704)による調査位置

4 光ファイバー情報管理設に伴う調査

所 在 地 甲府市丸の内1-6-1
事 業 名 光ファイバー情報管設置
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
調査期間 2003年8月21日～22日、9月18日
参考文献 山梨県埋蔵文化財センター『年報』20 2004.8

調査地點	県庁西門付近
歴史的位置	柳門南西部部分の内堀に面した石垣
調査面積	20m ²
検出深度	GL-0.6m
検出遺構	石垣
検出遺物	瓦
備考	石垣は埋設保存（裏栗石層も一部残存）

概要 調査地点では、正面を西側の堀に向けた石垣を確認した。石材は奥行きが1mほどの間知石で、矢穴が残っていた。矢穴の幅（5～6cm）と石材加工・石積技術から、幕末頃の比較的新しい段階に修復された石垣である可能性が高い。石垣の裏側に裏栗石が一部検出されたが、土墨は掘部分までのほとんどが消失している。検出された石垣の下部には、堀の埋め立てによって埋設された石垣が残存していると考えられる。



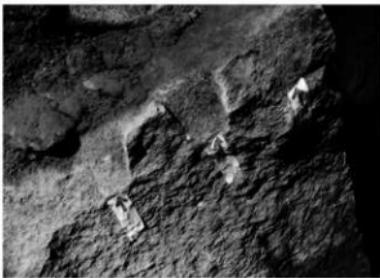
石垣出土地点概略図『年報』より転載



石垣検出状況1（東から）



石垣検出状況2（東から）



石材に残された矢穴痕

図II-8 石垣出土地点の概略図と石垣の検出状況

5 給水管改修および光ファイバー情報管埋設に伴う調査

所在地 甲府市丸の内1-6-1

事業名 光ファイバー情報管設置

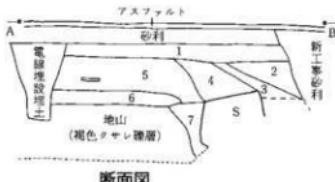
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査期間 2002年10月25~11月8日、11月20日

参考文献 山梨県埋蔵文化財センター『年報』19 2003.9

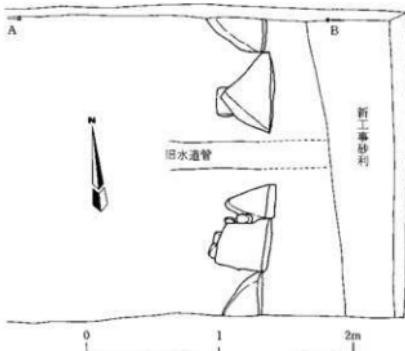
調査地点	県庁西門東側
歴史的位置	楽屋曲輪西側の土壘（楽屋御殿北西部）
調査面積	78m ²
検出深度	GL-0.3mで、土壘の層（石垣はGL-0.5~0.6m）
検出遺構	石垣・石組の溝・江戸時代の土壘
検出遺物	瓦
備考	遺構は埋設保存・遺構検出レベルで地山が残存

概要 楽屋御殿北西部にあたる調査地点では、GL-0.3mで石材面を東側に向け南北方向に延びる石垣を検出した。石垣西側には地山と土壘に係わる土層（5層・6層）の堆積が確認されたことから、内堀に面した土壘東傾斜面の土留め用の石垣であったと考えられる。また、報告番号6の延長線上にあることから、石垣の東側にも本来は石組があり、溝としての機能も有していた可能性がある。



1層 暗褐色粘土質土層
2層 黒褐色粘土質土層
3層 黑色粘土質土層（溝内を充填、瓦片を含み礫が少ない）
4層 明暗褐色粘土質土層（礫が少ない）
5層 暗褐色粘土質クサレ疊層（瓦が含まれる）
6層 白褐色粘土質土層
7層 暗赤褐色粘土質土層（表石を含む層）

土層注記



平面図

石組検出状況（北から）

図II-9 遺構図と検出状況『年報』より転載

6 オイルタンク設置に伴う調査

所 在 地 甲府市丸の内 1-6-1

事 業 名 県庁舎免震工事

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査期間 2001年12月20日

参考文献 山梨県埋蔵文化財センター『年報』18 2002.11

調査地點 県庁本館北側と別館西側の通路部分

歴史的位置 楽屋曲輪西側の内堀に面した土塁東傾斜面付近

調査面積 15m²

検出深度 GL-1.2m

検出遺構 石組の溝・石垣

検出遺物 近世以降の染め付け(磁器)、ガラス瓶、瓦

備考 遺構は埋設保存

概要 GL-1.2mで、ほぼ南北に延びる石組の溝を検出した。溝の幅は50cm~60cm(石を含めると1m)で、底面は石列上面からおよそ50cm(GL-1.7m)である。石材は、甲府城内の石垣と同様に安山岩で、加工がなされたものを利用している。また、写真中央にあるように、西側の石組上に一石だけ乗った状態でみつかった。検出された石組には本来は二段目が存在していた可能性が高く、報告番号5と同様に土塁の土留め用の石垣であったと考えられる。



遺構平面図と土層図



石組(北から)



石組(南から)



南壁断面

図Ⅱ-10 遺構図と検出状況『年報』より転載

7 給排水管の埋設に伴う調査

所 在 地 甲府市丸の内 1-6-1

事 業 名 県庁舎免震工事

調査機関 山梨県教育委員会

調査期間 2001年8月

参考文献 —

調査地點	県庁本館と別館の間の道路部分
歴史的位置	楽屋曲輪内の楽屋御殿
調査面積	—
検出深度	GL-0.5m
検出遺構	御殿に係わる石列
検出遺物	瓦
備考	遺構は埋設保存

概要 アスファルト舗装面から深さ50cmで、石列を検出した。石列は、縦長や方形状で不揃いの石材を幅30cmに配石したもので、南北方向に延びる。また、検出部分は長さ110cmあまりで、一部既設の埋設管の下に潜り込んでいる状態であった。石材の大きさ・形状・配置から、石垣や水路といった機能をもつ遺構とは考えにくい。絵図から遺構の位置を検討すると、楽屋御殿の敷地内にあたることから、御殿に係わる石列と考えられる。



調査地点（西から）



石列（北から）



石列（東から）

図II-11 調査地点と遺構の検出状況

8 光ファイバー情報管理設に伴う調査

所 在 地 甲府市丸の内1-8-5

事 業 名 光ファイバー情報管設置

調査機関 山梨県教育委員会

調査期間 2003年9月~10月

参考文献 一

調査地點	県民情報プラザ前
歴史的位置	内堀付近(外側)
調査面積	—
検出深度	GL-0.5 m
検出遺構	なし(安山岩の岩盤)
検出遺物	—
備考	協議の上、管の埋設に伴い岩盤の一部除去

概要 県民情報プラザ(旧西武百貨店)前から、平和通り歩道橋にかけて安山岩の岩盤が確認された。検出深度はおよそ5cmと大変浅く、道路舗装の直下から検出されている。確認された岩盤は、甲府城跡で検出されている岩盤と同じ安山岩で、矢穴等の痕跡はみられないものの石垣石材として用いられた可能性がある。



平和通り歩道橋下



岩盤の検出状況1(西から)



岩盤の検出状況2(東から)



岩盤の検出状況3(東から)

図II-12 岩盤の検出状況

9 情報管理設に伴う調査

所 在 地 甲府市丸の内1-6-1
 事 業 名 県庁舎集中化改修電気設備工事
 調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
 調査期間 2005年10月28日～31日
 参考文献 一

調査地點	県庁別館と議事堂を結ぶ連絡通路の東側
歴史的位置	楽屋曲輪御殿の北東縁辺
調査面積	—
検出深度	GL-1m
検出遺構	なし（安山岩の岩盤）
検出遺物	瓦（約80点）
備考	石材の配石は、埋設保存

概要 調査地点北側では、安山岩の岩盤がGL-1mで確認されたが、矢穴などの石切場と判断できる痕跡は確認できなかった。南側では、GL-0.7mで加工石材を含む30cmほどの扁平な石材が4～6石配石された状態で検出され、調査時は楽屋御殿に隣接する建物の礎石と考えられたが、周辺部の擾乱が激しくコンクリートの付着も確認されたことから、近世所産ではない可能性が高い。



調査地点（南から）



掘削状況 1（南から）



掘削状況 2（南から）



石材配石の検出状況

図 II-13 岩盤と石材配石の検出状況

10 水道管理設に伴う調査

所 在 地 甲府市丸の内 1-6-1

事 業 名 県庁舎屋外給水管改修工事

調査機関 山梨県教育委員会

調査期間 2004年7月22日～28日

参考文献 —

調査地點	別館東側
歴史的位置	二の丸西側の石垣周辺
調査面積	—
検出深度	GL-0.3m
検出遺構	なし（安山岩の岩盤）
検出遺物	—
備考	協議の上、管の埋設に伴い岩盤の一部除去

概要 県庁別館東側で、水道管理設に伴う掘削により岩盤が確認された。検出深度は、最も浅い所で舗装面から30cm、平均でも50cmほどであった。なお、安山岩の岩盤は、情報プラザ前（報告番号8）でも見つかっている。



調査地点（北から）



岩盤検出状況1（北から）



岩盤検出状況2（北西から）



岩盤検出状況3（東から）

図II-14 調査地点と岩盤の検出状況

11 情報管理設に伴う調査

所 在 地 甲府市丸の内1-6-1
 事 業 名 県庁舎集中化改修電気設備工事
 調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
 調査期間 2005年10月3日
 参考文献 —

調査地點	別館東側（報告番号9の約30cm東側）
歴史的位置	二の丸西側の石垣周辺
調査面積	—
検出深度	GL-0.3m
検出遺構	なし（安山岩の岩盤）
検出遺物	—
備考	埋設管の設置予定位置を一部変更しつつ岩盤の一部除去

概要 情報管敷設に伴う掘削により、最も浅い所で舗装面から30cmで安山岩の岩盤が確認された。調査地点は別館東側で、2004年度の水道管敷設に伴う調査地点のおよそ30cm東である。岩盤には、矢穴などの石切場と判断できる痕跡は確認できなかった。岩盤は、情報プラザ前でも確認されている。



調査地点（北から）



岩盤検出状況（南から）



掘削状況1（北から）



掘削状況2（南から）

図II-15 調査地点と岩盤の検出状況

12 ガス管理設に伴う調査

所 在 地 甲府市丸の内 1-6-1

事 業 名 県庁舎免震工事

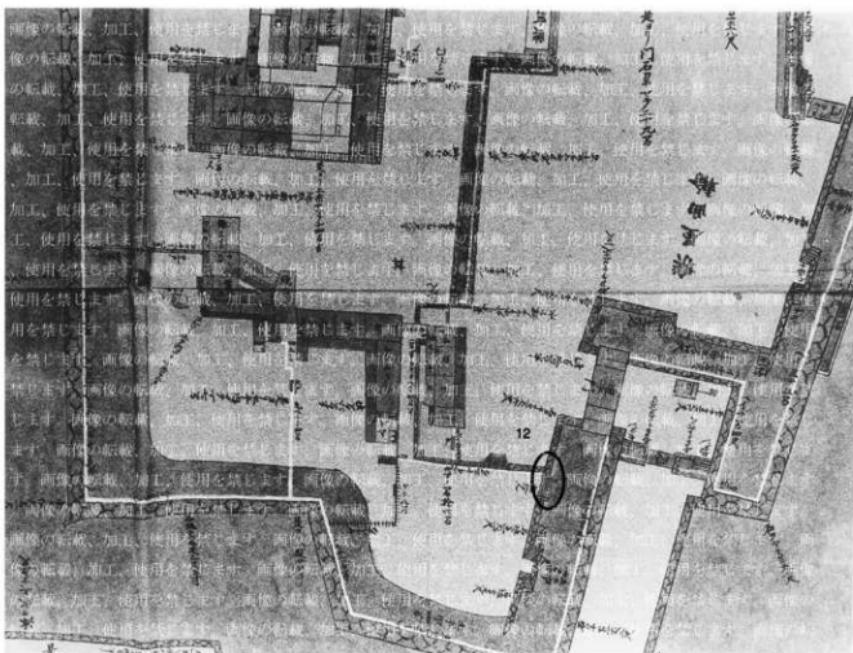
調査機関 山梨県教育委員会

調査期間 2002年7月

参考文献 —

調査地點	県庁東門入口（現在の守衛所付近）
歴史的位置	楽屋曲輪内の大手門（追手門）周辺
調査面積	—
検出深度	GL-0.6m
検出遺構	石垣
検出遺物	瓦
備考	埋設保存

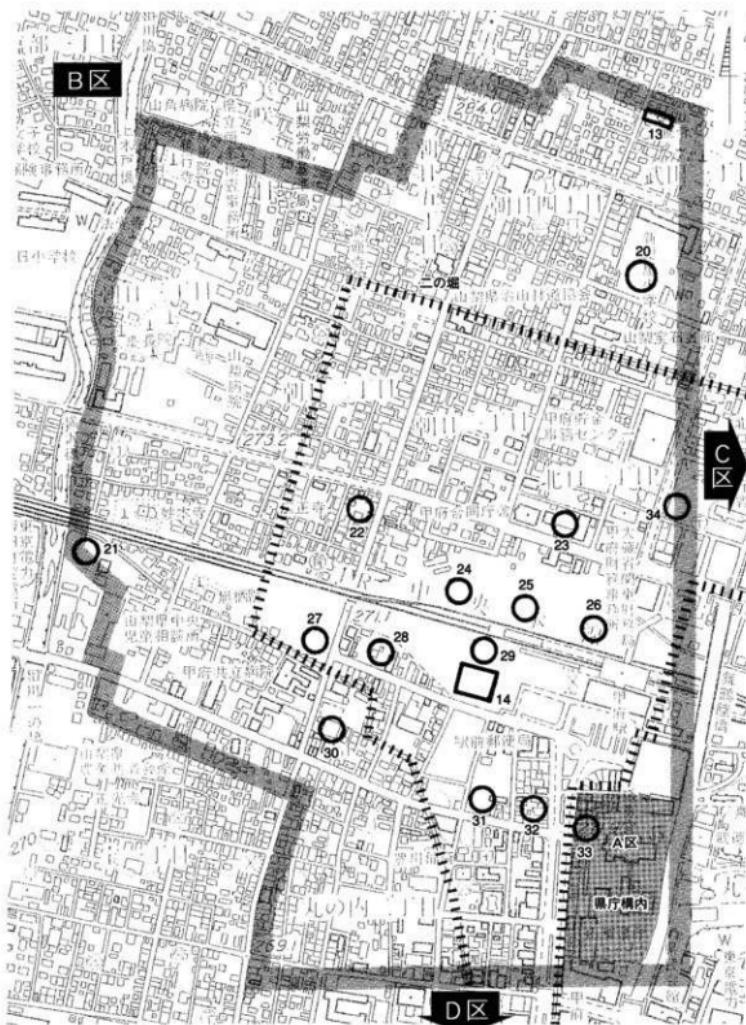
概要 アスファルト舗装面から深さ約60cmで石垣を確認し、埋設保存とした。絵図の検討から、石垣は内堀の内側にあった土塁に係わる石垣であると考えられる。



図II-16 「楽只堂年録」(1704)による調査位置

第3節 県庁周辺の調査

B区（13～14,20～34）：「甲府城下町遺跡」指定範囲の北西部のうち、県庁構内を除いた区域。



図II-17 B区の範囲と調査地点

13 裁判所長宿舎建て替え工事に伴う調査

所在地 甲府市武田1-88-1

事業名 裁判所長宿舎建て替え工事

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査期間 2003年5月14日

参考文献 山梨県埋蔵文化財センター『年報』20 2004.8

調査地點 宿舎東側

歴史的位置 甲府城下町：町人地（豊町）

調査面積 4.18m²（調査対象面積334.5m²）

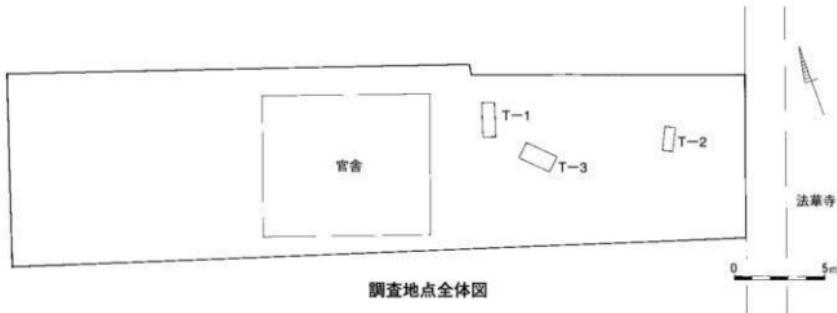
検出深度 GL-0.15~0.3m（近世の遺物包含層）

検出構造 —

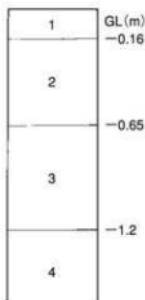
検出遺物 陶磁器・瓦

備考 —

概要 明確な構造は検出されていないが、設定した3ヶ所のトレンチ（T-1～3）全てで近世の遺物包含層が確認された。包含層の検出レベルはGL-0.15~0.3mで、暗褐色を呈していた。またGL-1mで、細砂層の堆積が確認された。



調査地点全体図



土層図

土層注記



遺物検出状況

図 II-18 調査地点と土層図

14 甲府駅周辺土地区画整理事業に伴う調査

所在地 甲府市丸の内1-1

事業名 甲府駅周辺土地区画整理事業（ビル建設工事）

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査期間 2002年7月1日～11月1日

参考文献 山梨県埋蔵文化財センター『年報』19 2003.9

山梨県教育委員会『甲府城下町遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第215集 2004.3

調査地點 甲府市丸の内1丁目1番地内

歴史的位置 甲府城下町：近世の武家屋敷地（御先手小路の東）

調査面積 1572m²

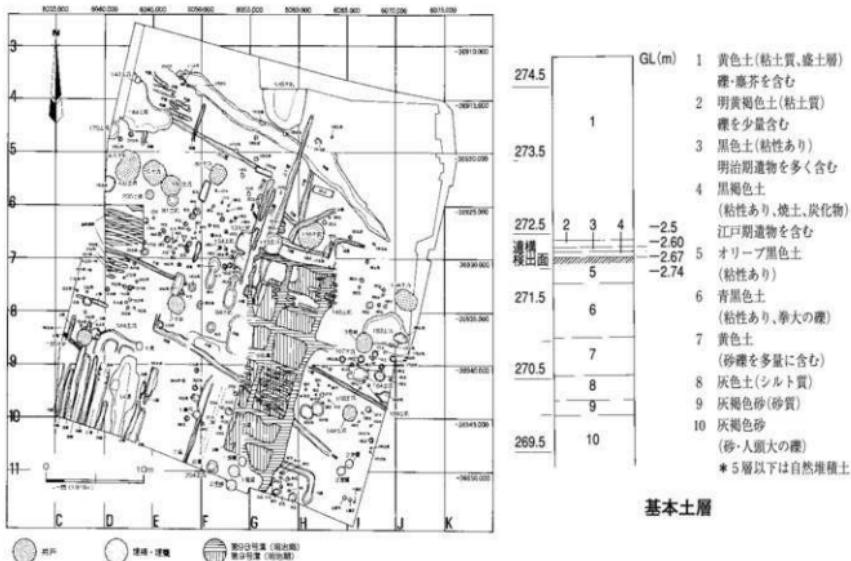
検出深度 GL-0.1～0.7m（甲府駅ビル駐車場面からはGL-2.5～3.2m）

検出遺構 土坑・井戸・溝・埋甕・埋桶・集石・柱列

検出遺物 陶磁器・瓦・石製品・金属製品・木製品

備考 —

概要 調査地点からは、中世～近代に該当する遺構や遺物が確認されている。遺構検出面は5層の最上面で、道路面からGL-0.1～0.7m程度である。また近世の地表面は確認されていないが、遺構等の検出状況から標高272.4m～272.5mで柱状図の1層～2層付近にあたると考えられる。



調査区全体図『甲府城下町遺跡』より転載（一部改）

図 II-19 調査地点と基本土層

C区（15～18、35～45）：「甲府城下町遺跡」指定範囲の北東部分のうち、県庁構内を除いた区域。ただし、甲府城跡を一部含む。

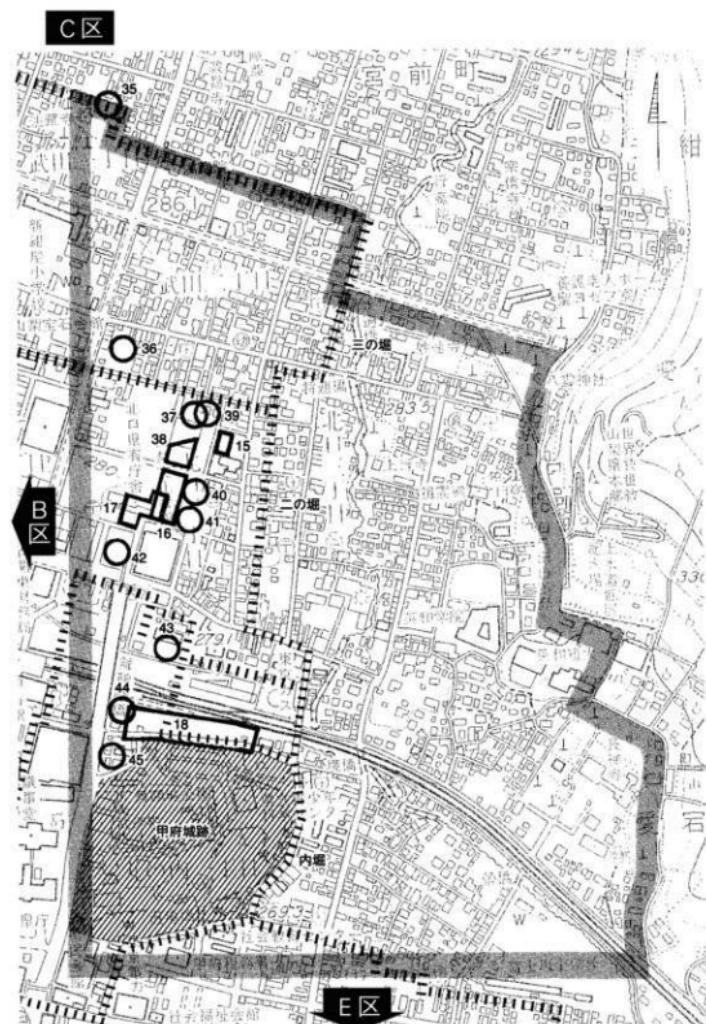


図 II-20 C区の範囲と調査地点

15 北口公用車車庫建設に伴う調査（日向町遺跡第1地点）

所 在 地 甲府市北口2-14

事 業 名 甲府駅北口公用車車庫建設

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査期間 1999年4月20日～5月20日

参考文献 山梨県埋蔵文化財センター『年報』15 1999.3

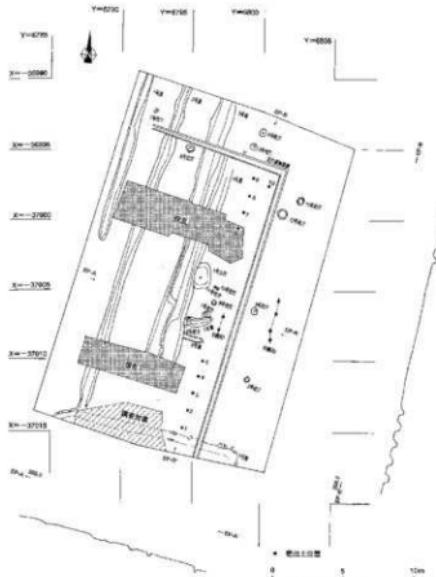
山梨県埋蔵文化財センター『年報』16 2000.5

山梨県教育委員会「日向町遺跡発掘調査報告書」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書

第170集 1999.12

調査地點	北口公用車車庫（西側部分）
歴史的位置	甲府城下町：近世の武家屋敷地（細工町）
調査面積	480m ²
検出深度	GL-0.4m
検出遺構	墓（江戸時代の可能性）・溝（時期不明）
検出遺物	古銭（寛永通宝）・陶磁器
備考	調査は、車庫建設予定地のうち大型車用として掘削の伴う西側部分だけが対象

概要 武家屋敷に関する遺構の検出には至らなかったが、調査区全域においてGL-0.4mほどで近世の遺物包含層（2層）に達する。2層の上部で遺物、下部では遺構が確認された。なお、土層図は調査区北東部で確認したものである。



調査区全体図「日向町遺跡発掘調査報告書」より転載

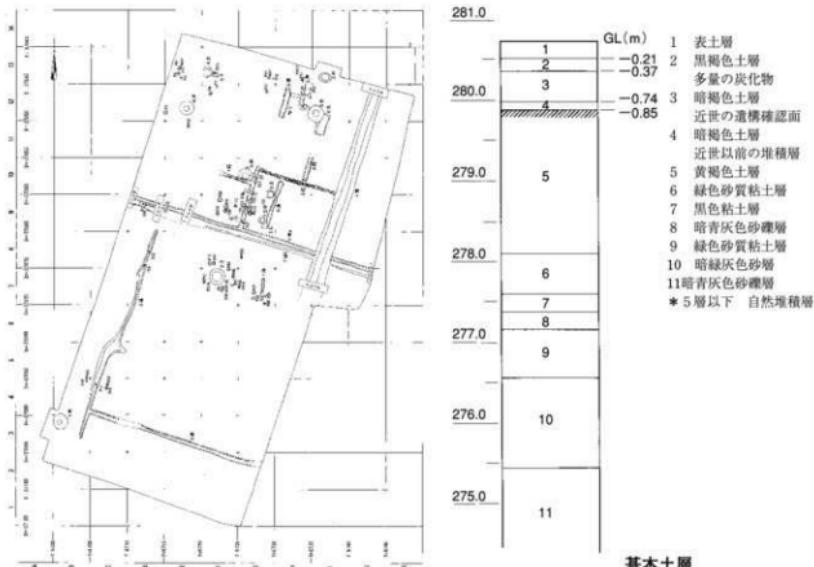
図II-21 調査地点と基本土層

16 北口駐車場建設に伴う調査（日向町第2地点）

所在地 甲府市北口2-11
 事業名 甲府駅北口駐車場建設工事
 調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
 調査期間 2001年11月1日～2002年2月15日
 参考文献 山梨県埋蔵文化財センター『年報』17 2001.11
 山梨県埋蔵文化財センター『年報』18 2002.11
 山梨県教育委員会『甲府城下町遺跡（日向町遺跡第2地点）』
 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第220集 2004.3

調査地点	山梨文化会館北側の立体駐車場
歴史的位置	甲府城下町：近世の武家屋敷地（森下小路の南）
調査面積	2400m ²
検出深度	GL-0.4m
検出遺構	井戸・溝状造構・石積溝・土坑・暗渠・ピット
検出遺物	陶磁器・土器・石製品・金属製品・木製品
備考	—

概要 甲府城下町の武家屋敷地であった調査地点からは、中世～近世に該当する遺構が確認されている。近世の遺構確認面は3層（遺物包含層）で、およそGL-0.4mである。基本土層は、調査区中央部で検出された第2号井戸および北端部の第4号溝状遺構の観察に基づくものである。



調査区全体図「甲府城下町遺跡（日向町遺跡第2地点）」より転載（一部改）

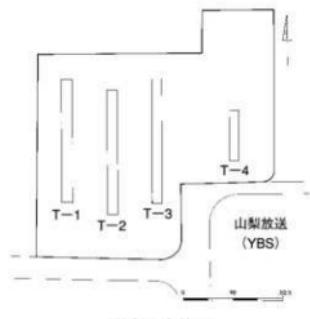
図II-22 調査地点と基本土層

17 北口県営駐車場試掘調査

所 在 地 甲府市北口2-8-10
 事 業 名 県営駐車場建設工事
 調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
 調査期間 1994年2月2日~3日
 参考文献 山梨県埋蔵文化財センター『年報』10 1994.3

調査地點	県営北口第一駐車場
歴史的位置	甲府城下町：武家屋敷地（橋小路の東）
調査面積	260m ² （調査対象面積3000m ² ）
検出深度	GL-0.3~0.4m
検出構造	土坑
検出遺物	16~17世紀の土師質土器
備考	—

概要 山手門北西部分で、絵図から武家屋敷跡付近であることがわかる。調査は、2m幅のトレンチ（T-1~4）を設定しおこなった。T-2ではGL-0.6mで土坑が検出され、土坑内から土師質土器が出土した。T-3ではGL-0.3~0.4mで近世の遺物包含層（暗褐色粘質土層）を確認した。



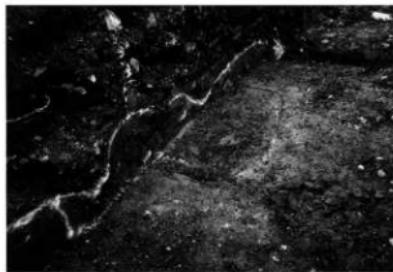
調査区全体図



全景（南東から）



T-2（南から）



T-2内の土坑検出状況

図II-23 調査地点と岩盤の検出状況

18 舞鶴城公園北側市道部分の調査

所在地 甲府市丸の内1-1

事業名 舞鶴城公園北側市道切り回し工事

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査期間 2005年12月7日

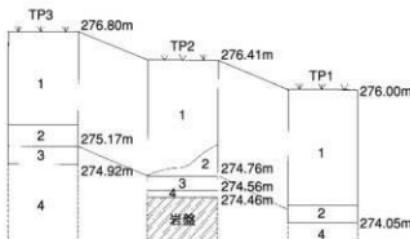
参考文献 —

調査地点	石垣から2mほど北側の道路舗装部分
歴史的位置	甲府城：内堀
調査面積	9m ² （調査対象面積600m ² ）
検出深度	GL-1.6m
検出遺構	堀底（安山岩の岩盤）
検出遺物	瓦
備考	埋設保存

概要 調査地点は旧甲府城北側の内堀で、現在は甲府駅南口前から東へ通り抜ける車道及び歩道部分にあたる。調査は車道の舗装部分のうち3ヶ所にテスビット（以下「TP」とする）を設定し、重機による掘削を行った。既存の水道管とガス管の埋設等によって、現地表面から深さ120cm～160cmまでは砂や砂利の埋め立て部分であった（1層）。2層は明治以降の埋め立てで、TP1では多くの瓦が出土したが、TP2・TP3ではほとんど出土していない。黄褐色の粘質土層（3層）は、TP1では堆積がみられず堀全体に平面的な広がりを確認することはできなかった。しかし3層は自然堆積層で、直上から直径40cm大の石が数点みつかっていることから、この層が江戸時代の堀底面と考えられる。各TPで検出された堀底面を線で結ぶと（TP1は推定）、現地表面同様に西から東へ傾斜していることがわかる。また、TP2では4層直下（GL-1.95m）から安山岩の岩盤を検出した。



調査地点



- 1 砂・砂利による埋め立て
- 2 赤褐色土(大小の石を多量に含む)
明治以降の埋め立て
- 3 黄褐色の粘質土層
江戸時代の堀底面
- 4 灰色の粘土層(不透水層)
- * 3層以下は自然堆積土

土層概略図

図II-24 調査地点と土層



調査地点（西から）



重機による掘削状況



TP1の堀底面検出状況 1



TP1の堀底面検出状況 2



TP2の堀底面検出状況 1



TP2の堀底面検出状況 2



TP3の堀底面検出状況 1



TP3の堀底面検出状況 2

図 II-25 調査地点と各TPの検出状況

D区 (19) : 「甲府城下町遺跡」指定範囲の南西部のうち、県庁構内を除いた区域

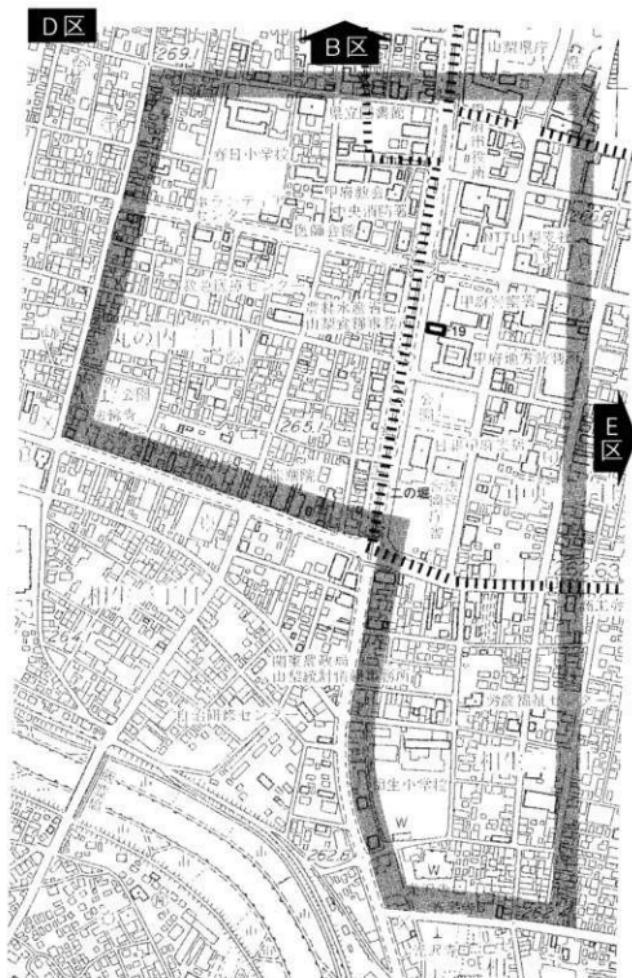


図 II-26 D区の範囲と調査地点

19 甲府地方裁判所改築に伴う調査

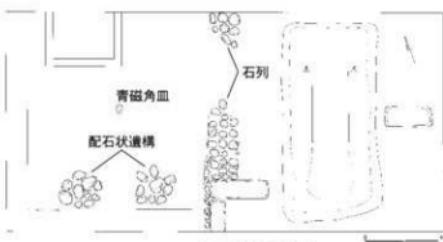
所在地 甲府市中央1-10-7
 事業名 甲府地方裁判所改築工事
 調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
 調査期間 2002年6月25日~26日
 参考文献 山梨県埋蔵文化財センター『年報』19 2003.9

調査地點	庁舎北西部分
歴史的位置	甲府城下町:近世の武家屋敷地(西小路の西)
調査面積	36m ² (調査対象面積5631.66m ²)
検出深度	明治:GL-0.4m・江戸:GL-0.7m
検出遺構	配石状遺構・石列
検出遺物	陶磁器
備考	埋設保存

概要 庁舎北西部分に2ヶ所のトレンチ(T-1・T-2)を設定し、調査した。T-1から江戸時代の配石状遺構や石列のほか、遺物が確認された。T-2では、遺構・遺物は検出されなかった。



調査区全体図



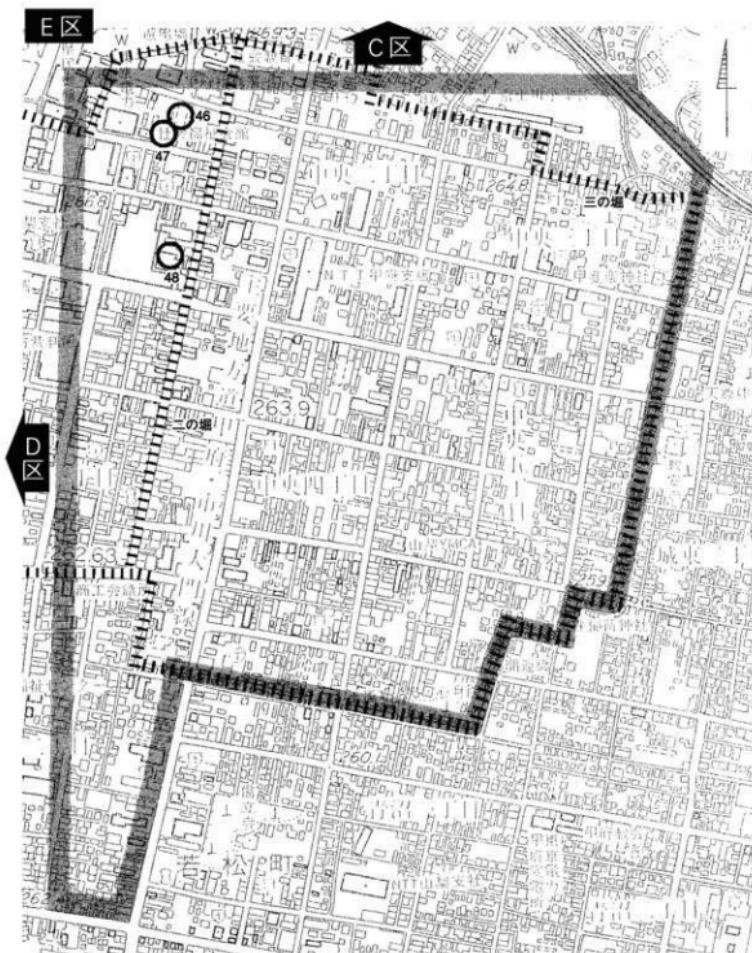
T-1内の遺構配置図



T-1 (南から)

図 II-27 調査地点と土層図

E区(46～48)：「甲府城下町遺跡」指定範囲の南東部分のうち、県庁構内を除いた区域。県教育委員会による調査はおこなわれていない。報告番号46～48については、第3節でふれる。



図II-28 E区の範囲と調査地点

第4節 県庁周辺におけるその他の調査

本節では、甲府城跡ならびに甲府城下町遺跡の全体像の理解を深めるため、甲府市教育委員会が実施した調査の成果が公開されている範囲内で掲載する。なお、調査位置は図II-1・図II-17・II-20・II-26・II-28に示しているため、ここでは省略する。

	①遺跡名	②所在地	③調査面積	④歴史的位置	⑤検出深度	⑥検出遺構・遺物
20	①甲府城下町遺跡	②甲府市武田1-3(新緑屋小学校内)	④町人地(堅町)	⑥(遺構)石組の溝(遺物)陶磁器		
21	①甲府上水道跡	②甲府市宝1-4	④上水跡	⑥(遺構)上水跡(水路、杭)		
22	①甲府城下町遺跡	②甲府市朝日2-5	④武家屋敷地(新手先小路)	⑥(遺構)溝(遺物)陶磁器		
23	①甲府城下町遺跡	②甲府市北口1-2(法務局東側)	④武家屋敷地(横沢町)	⑥(遺構)溝・井戸(遺物)陶磁器		
24	①甲府城関係遺跡B西区	②甲府市丸の内1-1	④武家屋敷地(橋小路の西)	⑥(遺構)溝・井戸・穴蔵(遺物)陶磁器		
25	①甲府城関係遺跡B区	②甲府市丸の内1-1	④武家屋敷地(城代家老・山手勤番士役宅)	⑥(遺構)井戸・水溜・石列・杭列・溝(遺物)陶磁器(焼き塙塗)・瓦(花菱家紋瓦)・土製品・石製品・キセル		
26	①甲府城関係遺跡A区	②甲府市丸の内1-1	③1850m ²	④武家屋敷地(城代家老・山手勤番士役宅)	⑥(遺構)井戸・溝・ピット・溜池(遺物)陶磁器・土製品(漆など)・瓦・金属製品(古銭・キセルなど)	
27	①甲府城下町遺跡	②甲府市宝1-1	④二の堀	⑥(遺構)二の堀跡(遺物)陶器		
28	①甲府城下町遺跡(裏先手小路)	②甲府市丸の内1-8	④武家屋敷地(裏先手小路)	⑥(遺構)裏先手小路道路面(遺物)陶磁器		
29	①甲府城関係遺跡42・43街区	②甲府市丸の内1-1	④武家屋敷地(裏先手小路)	⑥(遺構)溝(遺物)陶磁器		
30	①甲府城下町遺跡	②甲府市丸の内2-9	④町人地(馬場先小路)	⑥(遺構)井戸・屋敷境の間知石積み・溝		
31	①甲府城下町遺跡	②甲府市丸の内2-4	④武家屋敷地(馬場先小路)	⑥(遺構)溝・ピット(遺物)陶磁器		
32	①甲府城下町遺跡	②甲府市丸の内2-3	④馬場・普請方定小屋(柳沢期)・御米藏(勤番支配以後)	⑥(遺構)馬場跡・井戸・石組の溝・暗渠(遺物)瓦・陶磁器・鉛鉄甕玉		
33	①甲府城内堀	②甲府市丸の内1-7	④内堀	⑥(遺構)内堀跡・石垣		
34	①甲府城下町遺跡	②甲府市北口2-10(武田通り沿い)	④武家屋敷地(橋小路)	⑤GL-0.9m(武田通り舗装面からGL-0.3m)	⑥(遺構)溝・井戸・埋植(遺物)瓦・陶磁器	
35	①武田城下町遺跡	②甲府市武田1-6	④三の堀	⑥(遺構)三の堀跡(遺物)陶磁器・土製品・古鏡		
36	①甲府城下町遺跡II	②甲府市武田2-1	③650m ²	④町人地(新緑屋町)	⑤GL-0.2~0.4m	⑥(遺構)上水道構溝・土坑(遺物)陶磁器・木製品
37	①甲府城下町遺跡I(桜シルク路)B区	②甲府市北口2-15	③300m ² (1000m ²)	④二の堀	⑤GL-0.1m	⑥(遺構)二の堀跡・土壘基底部・井戸(遺物)陶磁器・金属製品・木製品
38	①甲府城下町遺跡I(桜シルク路)A区	②甲府市北口2-15	③700m ² (1000m ²)	④武家屋敷地(森下小路)	⑤GL-0.4m	⑥(遺構)井戸・溝・土坑(遺物)古鏡・瓦
39	①甲府城下町遺跡	②甲府市北口2-15	④二の堀	⑥(遺構)二の堀跡・土壘基底部		
40	①甲府城下町遺跡	②甲府市北口2-50	④武家屋敷地(森下小路)	⑥(遺構)井戸・溝・土坑		
41	①甲府城下町遺跡	②甲府市北口2-50	④武家屋敷地(森下小路)	⑥(遺構)溝・井戸・ピット(遺物)瓦・陶磁器		
42	①甲府城下町遺跡	②甲府市北口2-8	③650m ²	④武家屋敷地(山手小路)	⑥(遺構)溝・土坑	
43	①甲府城下町遺跡30街区	②甲府市丸の内1-1	④清水曲輪(山手門)	⑥(遺構)石垣・山手門土橋(遺物)瓦・陶磁器・漆噴片		
44	①甲府城屋形曲輪	②甲府市丸の内1-4	④屋形曲輪	⑥(遺構)大量の瓦		
45	①甲府城屋形曲輪	②甲府市丸の内1-4	④屋形曲輪	⑥(遺構)大規模瓦淵(遺物)違い鷹の羽家紋瓦		
46	①甲府城下町遺跡	②甲府市中央2-13	④武家屋敷地(追手脇)	⑥(遺構)溝・溝状遺構・ピット・土坑(遺物)陶磁器		
47	①甲府城下町遺跡	②甲府市中央2-13	④武家屋敷地(追手脇)	⑥(遺構)溝・井戸		
48	①甲府城下町遺跡	②甲府市中央2-2-1	④武家屋敷地(土手小路)	⑥(遺構)溝・土坑(遺物)陶磁器・土製品・古鏡・木桶		

表2 甲府市教育委員会による甲府城下町遺跡の調査一覧

第Ⅲ章 まとめ

遺跡の残存状況

遺物包含層 近世の遺物包含層は、甲府駅北口側の調査地点など数カ所で確認されているが、市街地の近代化のなかで遺物包含層が残存していないケースも多い。こうしたケースでは、搅乱層中から多くの遺物が出土している。

石垣 県庁構内では7地点から石垣が見つかっている。県庁内の土地改変によって整地がおこなわれ、根石付近まで取り除かれているケースもあるが、根石よりも上部の石垣部分が埋め立てによって埋没していた地点も確認されている。

土塁 整地によって大部分が消失しているが、県庁構内と城下町遺跡内の合わせて3地点（報告番号5、38、39）で土塁基底部付近の残存が確認されている。

遺構の検出深度

県庁内 県庁構内では、石垣・土塁・石列がみつかっている。このうち、石垣や石列は浅い地点ではGL-0.5mで検出されている。本報告書に掲載した調査地点では、根石近くまで石垣が取り除かれているケースが多かったが、石垣は本来幾段にも積まれているため、石垣の残りが良ければこれよりも地表面により深い深さでみつかる可能性がある。石垣と同様に高く築かれた土塁は、今のところ一地点（報告番号5）でしか確認されていない。しかし、その検出深度はGL-0.3mと比較的浅いため、内堀付近の掘削では注意が必要である。県庁構内及び周辺では、安山岩の岩盤が4ヶ所（報告番号8～11）でみつかっているが、矢穴痕など石切場と断定できる十分な痕跡は確認されていない。

甲府城跡及び甲府城下町遺跡 遺構検出深度が把握されている調査のなかで、甲府城下町遺跡I（桜シルク跡）B区（報告番号38）でみつかった土塁はGL-0.1mともっとも浅く、地表面直下であった。また三の堀南側の裁判所長宿舎建て替え工事に伴う調査（報告番号13）では、遺構は検出されなかったもののGL-0.15mで遺物包含層が確認されている。甲府城下町遺跡（報告番号14）のように、造成による盛り土によって遺構検出面が深い事例も確認されているが、甲府駅北側を中心とした調査ではおよそGL-0.3～0.4mで遺物包含層や遺構が確認されている。また遺物包含層が消失している地点では、およそGL-0.6mで自然堆積層に達し、層中に遺構が残されていることが多い。

今後の留意点

図II-1に示したように、甲府駅を中心とした範囲に発掘調査地点が密集していることから、近代の開発が頻繁に進められていることがわかる。開発工事によって遺物包含層が消失している地点も多くあるが、近世の遺構は自然堆積層にまで達しているため遺構の検出が可能であり、これまでに多くの調査成果を上げている。また、原位置から動いている表土中の出土遺物であっても、絵図との比較検討によってその土地利用について推測が可能となるケースもあるため、掘削を伴う工事では注意が必要である。

県庁構内ではGL-0.5～0.6m、地点によりばらつきがあるものの甲府城下町遺跡では、GL-0.3～0.4mで近世の遺構検出の可能性があるため、この深さを超える掘削では特に注意が必要だといえる。また、遺跡指定範囲は中世にも土地利用がされており、近世の層と自然堆積層の間に中世の遺構が検出されることがある。

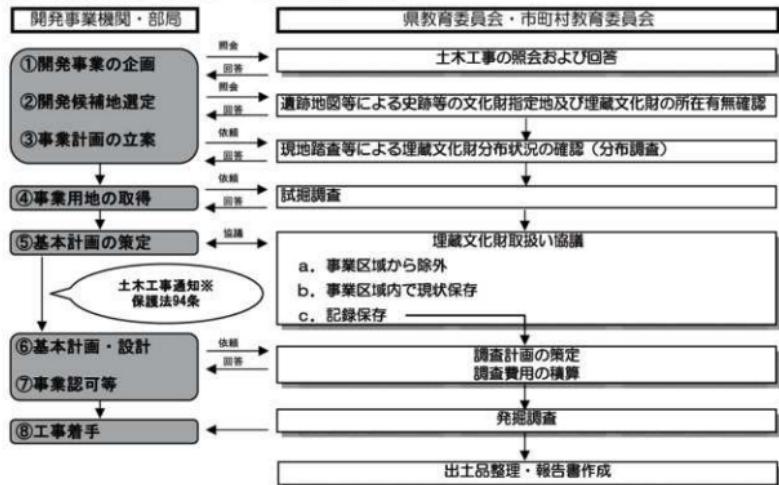
県庁構内及び周辺では、安山岩の岩盤がみつかっている。これまで、矢穴痕など石切場と断定できる十分な痕跡が確認されていないが、甲府城跡内には石垣用石材の供給源となった石切場が残されていることからも、こうした岩盤から石材が切り取られた可能性は高い。そのため、岩盤の保存に努めるとともに除去を行う前に十分な協議・検討が必要となる。

付 編

この報告書は、次のフロー図にある流れの中で実施された調査をまとめたものです。
文化財保護の基本的な考え方



埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の取扱い実務の流れ



※民間による土木工事届出の場合（94条）は、市町村教育委員会と協議の必要があります。

報告書抄録

ふりがな	こうふじょうあとしゅうへんかくにんちょうさほうこくしょ						
書名	甲府城跡周辺確認調査報告書						
副題	県庁構内及び甲府城下町遺跡関係立会・発掘調査等報告						
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第232集						
著者名	宮里 学・上原 健弥						
発行者	山梨県教育委員会						
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター						
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL055-266-3016						
発行日	2006年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
所収遺跡		市町村	遺跡番号	○○○	○○○		
指定史跡 甲府城跡・ 甲府城下町 遺跡関連	山梨県 甲府市	19201	115	新36° 03' 50"	新138° 54' 44"	本文参照	本文参照
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項
指定史跡 甲府城跡・ 甲府城下町 遺跡関連	城郭・ 城下町	近世		石垣・土壘・溝・土坑・ 井戸		陶磁器・瓦	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第232集

甲府城跡周辺確認調査報告書

県庁構内及び甲府城下町遺跡関係立会・発掘調査等報告

印刷日 2006年3月25日

発行日 2006年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県甲府市下曾根町923

TEL 055 (266) 3016

発行 山梨県教育委員会

印刷 株式会社 少國民社